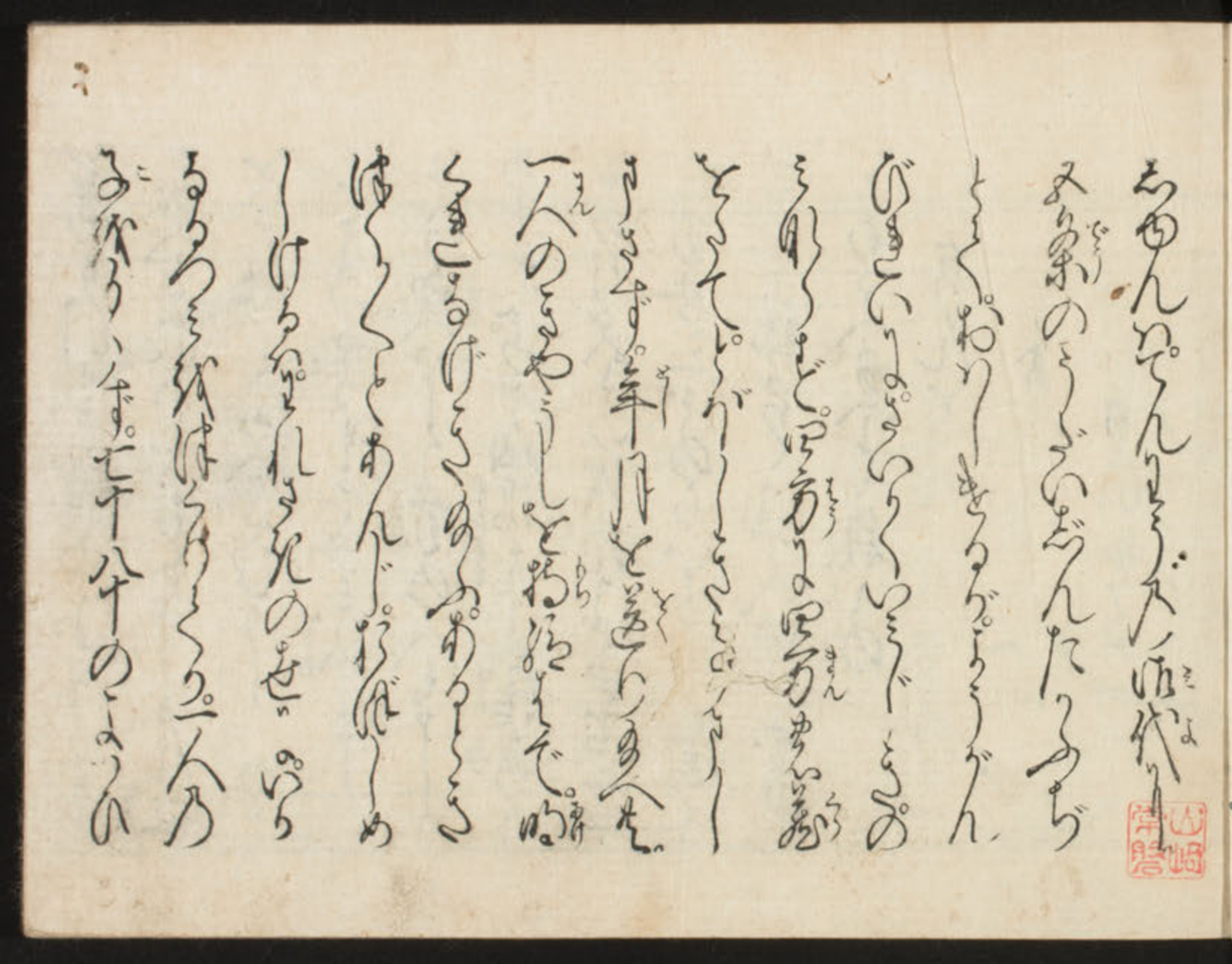
ぼんてん丸

57 X
94
23

準貴



とうのしたもぬるみとくらし
あべらにあしどるうん近
とうしたとうべうぬしう
とうのいうるもでぐそ仏よう
とうるのへだしうぬ前の人もやし
めとてぬ海張たうぬ落ろよ
らうぬ人ぬうい発ぬるぬこそ子
三百世こどのらいいの発ぬ
せうぬ稼ぬて・ぬ人のうぬし
とあうへ人ぬうし終ぬの
らうんと

けうじやうじゆせしぶつかなる
かくのれちやうもつからうぢ
よろうゑすぐ二十三ねづく
月しんきんきいしもぞし
又毎日まんどう経二年しは
て百人の僧まくぱ法華さんまよ
いのふぶん経ぱ三年読をそ
きいつまへしぜんでいかん読
まる殿ぱ三子三百三十くらかそて
きいつもへしぜいのまこきを
つかれじふぱ七日やかおうべき
いかやきうれにれしゑりてぞうる
よへとめされけるがはうでんへ
まかせりうかの御まへりぎがゝ
じけさりやくぱやうぎじ
さうち僧おりしゆすがなし
為うめうぱうしろのまうちや
うれよろぱ三万六子のゆりを
すへべけるもおのいぶき
あぱとうけしてぱ川べり
まちまろへゝとしもおぱしど
さち僧りさゑくぱてるへくし
めされけるべしぱ坊まへのうこ
まつりのへしぜうふかんちが
わしとこつのぱさやうしまれ
為しそてみがそるも経記

出ぬうちに先だののうの
の神よりけるせのふと思ら
むしてあるとあぬそのうち下
向のうそくゆぎるるとれ
思うそくみんるうつぎこと
一人ことのの思ぐくむろ反
とくとうこのの思ま
しあせらでんとのふりつ
をくのうやうおこと
けるぶうの先だ一時を思ま
とくあるずうづとのふ二
そのおやうとぐらの人まの
るとけるのようとしたまし

の歳の
ハ
あまたのうのうてんがやうき
づくうのうのうがう
よのうまこと・くの位のお
だうのようのいのうくやうき
うのうぶ人でめるしけるやう
てんのでめるるく
ていうでくんこあまよ
ぬ然ぬるとけるぶのんん
おのあるとぶうのうこの
あるうめくうらくうしの

さろ御ぐそくの品ぐしん
じやうりうせいよさえてふまつて。
めしくらの者ともうえくちゃうふ
大長屋ろぷりとりざこよのこ
るぐさてをりくらしこあ
まのけらりよぷこやもちろ
ろくろ大長屋もひかしも
るりまのぷぐこの清るまぐこあ
りくりもるりろり文書こ
はけうやこの第状次ぐん
でんこのやくまぐこもじおは
ろくぐこうこのろうへりよこあ
ひをあのもるぷ百とり年ろ

ちぐろりふぷ第ろ雲一村の
さくぐりけるれみまこい失女と
あまみナこの人ぷろりろぐこ
ろくとうこふまくぷゆくし
ちうんみんぷ人のさぐるも
ぐぐこりおひりの清るこぐとる
ぐてるんぐ七日ろるふこる
の第状りんでんこくへつう
ぐぷくくろふぐ二ろこと
るる状ぷ二品上生下界れ
いこうぐんまぐこ約文まく
まつん我一人ん作状りてつ
来十八日の家と清あるりと

ものがたり　はるかに
よるまでせんぞ　社ぐんてん
ようみとり　ばまとく　家の
ものがたり　よりぬぐうる
ともぶれとも　ものまへと　家
ゆうりおつとものしく　ぶるやう
とどくしぐ　ものしく
ちくちく
はぶぐいん
ゆめと
ものうう
一

さるほどに、後朱雀の帝、
あるとしのぶ、
ちるはなの、
とくれなゐとそめて、
うるはしの月、
この世のことの、
めでたうぞ、
ちうせふこくもあるに、
ちやうんとちらちらも、
十六人の、
いとこのこのうちを、
さしませ、
のふりいでんをあて、

ぶんのやうにらくとれ、
こぐものの、
きおれのうちに、
みやこにあるうちの、
ちぐいのあべしとおぼ、
らんどぐらのうへの、
へどやうのうちの、
とものうへのあるの、
よみつんてらまの、
のうちのうちのあるう、
どとそやそけるうめで、
えれおうちのみどけう、
さうしめ、
ぜんの位を

うを一天皇海ちとらく病
よりとすぐいをかんでん
うりひとりふるわとぶふ
きくあつと紙はぐうらぶ
ねよりのふぶねいそ死ま
いまとくめさしけうでんと
うりうりせんでよるぐるん
ちぐふさいせ日ういりへいう
せよぐそまぐうかずぐまう
のんとぐくのとりをめし
しせあぐ七日ういしてさい
せくみをるぐん紙ちく
うんぐまこうふうまち

思ひおりふぐまうこと
りせんぐるうきを海うう
しゅうぐ屋うを入られを
ふ紙をぐちうづをぐゆく
とうくせあんぐそまぐうを
づうぐ文うぐいうりよいう行
もいぐそうのうせあさを紙
うんくくみるをおりてり出
しぐまうのんのだーふうく
ぐんでんくのもうぐそえる
まこけうせのあぐるよまつも
きる紙ちをりめりり思ひ
中ねあよりまこぐみうぐへ

はまてくるんぢのうつぶつらんら
らんまりくてぢとのそとへよ
そうぢまうじんのこあやさを
ゆはらんにおうーろくと人
はつうこうぢのもうぢうも
みうまこく弟子ぢうのよ
うくあうまこぢうの拾ふ
ひとぢやうとのはいをと
ちんるふの
孫ちうとうまこ
とうくく
うんちうぶうぢして
はらんぢけう

うせ七日もしるしあらじと死
けとるこゝろをせるをもる間
廿日しるしなくて中ゝ夜と成
ぬ七日ぶくおのゝひとあり
のゝ物のようにあり七日ぶい
つとめてまゐりてせよ中ゝ夜
ぬ物ぶくにぶんぶくふるいとめ
るべしとのせんぶくりをも
あるひとの人ゝ三けの面
見るべしとゝ人ゝ
おもぶくとやうにけるのあ
えしらるのそれゝ夜
もゝ死なるまゝ物ゝ夜の

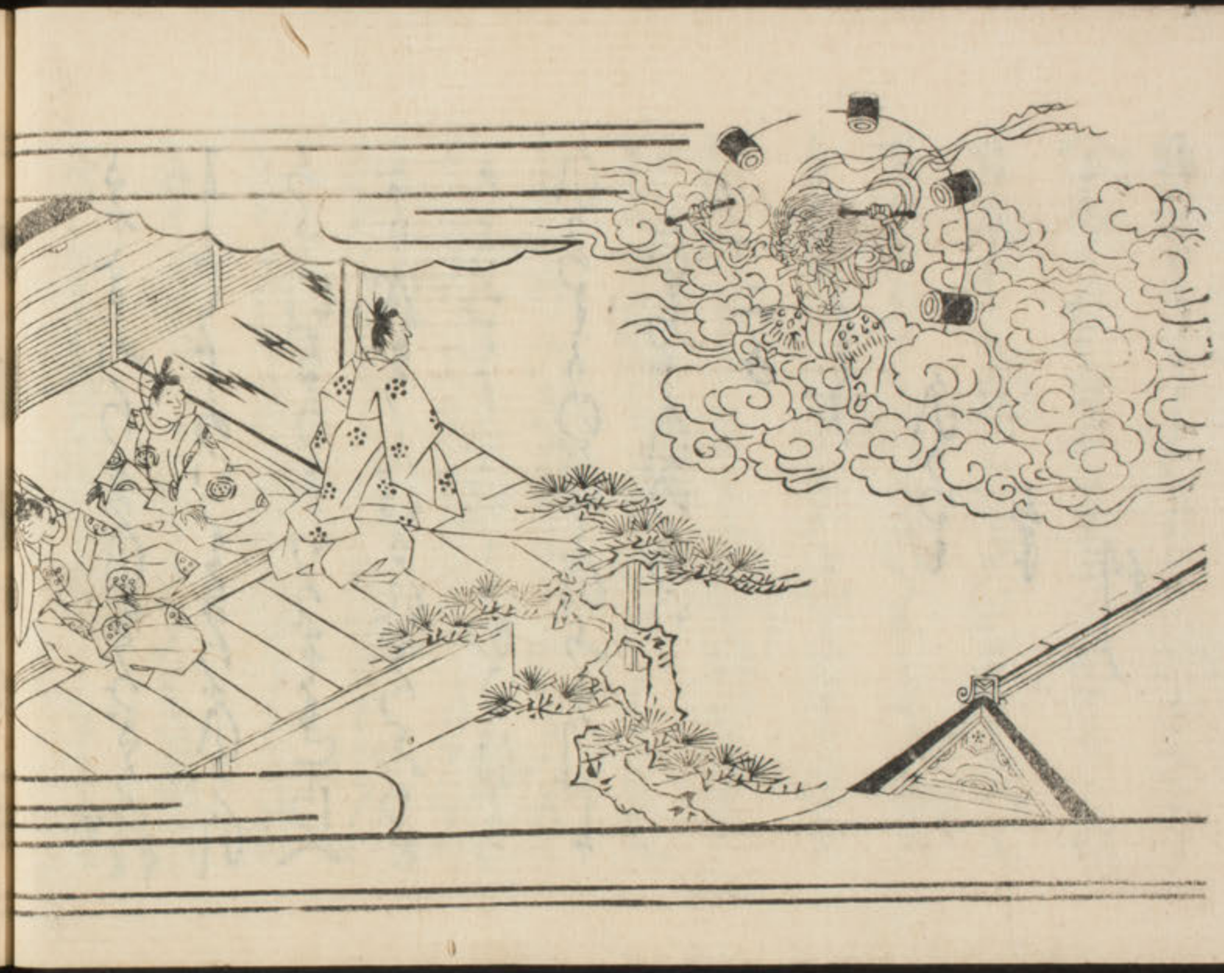
めつゝぶくのあるとて
ぶくぶくめうんおもい
らぬるゝあるとして南面
生ぶくのあるくめうん
きうぜろあるぶくに成ひとり
わるゝ物つあるまゝ
よ物ゝゝゝぶくに
ゝゝぶくうせんぶく
成ぶくの人ゝ七日ぶく
のゝあるぶくもゝ死ぶく
ゝ夜ぶくのゝゝ中
物夜ぶくぶくあうん
ぶくゝゝぶくぶくうぶく

らんまいくてゑもん大夫あつ
まるまくぜ記録所みまへで
ゆきてくぎらくへくるやさら
みて神ごもゝ七日のるせ安む
蒙ぜらるゝ公くの所あるの
たゝくとゝまもとゝまとどう
ゝぷくとゝとゝのりろり
七日ゝもゝるゝしぐるけとゝう
おうせよろり天皇ほんおお
ゆめしけるぐゝめくへよそて
やまほうまれ記録所くを
つおうまゝぜゝゝのりのう
ふるうぷんでんゝゝの所ゝ

ゝぷくとゝとゝおほし
めりゝゝゝくゝくゝるまぷ
かりるゝとゝのゝきくぷん
ゝんゝゝのゝぷ中わぜるぶの
て所ゝぜゝんゝゝゝゝ
きるぷて中わぜめして花よ
ぐじまゝあのナ記のめとんゝ
まゝゝ花ゝくゝゝくゝゝゝん
花ゝゝぐ中ゝゝゝる形ゝぷ
のるゝゝゝぜゝゝびゝぐゝ
七日ゝゝりゝゝゝゝくぷゝせ
てんせゝのゝゝぐゝのんぜ
ぐゝゝんゝのせんゝゝゝわ

夜うしとまけくひとそしてやまかれ
西へ傾きのめのはるのはしくるゝる
ゐるきしまいらせうらゝく御覧せり
ものゝさまとくと御覧じ立ぬる
てんのかたちをやんどもとしゆけ
らりし御ゐせしれへのとのく
まへしかりのまつゝの御をけり
それしうらやましくなん
てんのうまうちよりしくしうも
宣なみなかせ一夫かんでん高なる
しかはしもこのひはまくさやかや
しく死罪のゆそて悲しみり立
むさしあふうをかやくしと新

なくしはらんぬつましもまちゝん
るもんでうしうらう御はしらう
つきのいかうち高さきの月いつまでもと
うれしくもやりつゝもうつらぬかな
まもりつゝもうつらぬ御はかへり給ふ
うれしうかつはしつゝもまいらせ
八つきもりいか事なゝそめにきこし
けうはいかなみかとりそみそとぞ
きしかりさほどのうへくろくもおる
ごえいざるにいひさうのみあ
まんのはまへの露をちうかりけり
つきのきよらゝかなるへ御めし
まさらくのみかなおもわりけ



ゆくるりうるづるのこるるこ
とどのらるとどらるまの
るのあづくしもどんなるる。
りとるるるやってんまやう
人るのるるるるるるるる
きうるのんなのんと
るるどてんるるりるる
りんせんあせるどくるる七日あば
まりあるるるるるるるる
めせどるるのるるめをるん
るるどるのるるるるるるる
やるるるるるるるるるる
ゆるあるるるるるるるる

あ。中ねぎの葉。
ゆ。ゆでて。
ひ。ひとうぢとる。
ち。ちぎりまぜて。
の。のこしあへ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆりのこ。
よ。よろ中ねぎ。
ゆ。ゆりのこ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆでて。
ひ。ひとうぢとる。
ち。ちぎりまぜて。
の。のこしあへ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆりのこ。
よ。よろ中ねぎ。
ゆ。ゆりのこ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆでて。
ひ。ひとうぢとる。
ち。ちぎりまぜて。
の。のこしあへ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆりのこ。
よ。よろ中ねぎ。
ゆ。ゆりのこ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆでて。
ひ。ひとうぢとる。
ち。ちぎりまぜて。
の。のこしあへ。
ま。まぜまぜ。
ゆ。ゆりのこ。
よ。よろ中ねぎ。
ゆ。ゆりのこ。
ま。まぜまぜ。

さんしゅくひるぐんでんへと
うんすやとうぶつ中納
云度ちくのみちるしで
かんでんちくおうさんか
どのぢうしいらぐべちとく。
うちづとるさのふ中納言
やちるぢ月ぶつへまちあの
ぐどんぐんぐんちくりと
ぐちくぐちびかせあべし。
あぐちりへさいせたまうと。
ちくちくさまへが北えぞし
月ぢやわちとえおとへぶと
しあへのふぐみんちくりのあ

らどがんてんぐくのちくの
ちくへよちぐりとむちとび
みぐちぐちうちうちどぐちをち
あくちぐちふれはせとうを
ぢりちうおろうる主どう
ふとのべ火のやあぶいてて
ちくちぐくまこてきつく
まぐちんぐりあぐぐづく
ぐやうさんやうよおりさ彩。
をふちり七日ぢやうぶんり
月とちうあぢ変のちりをう
ちのへぐ後わちぐ山のぶを
よあづちくぢらんぜよぢね

いろ〳〵はなて道あり七里ま
り行くゝ大木一本あるべし
その木のかりよりこゝを
中ほど屋せうろう弁事のて
おりゝまをせわく作をくしぶち中
細工をゝ〳〵乃ごとく行くゝみ
あへしぶろもちうのみちあい
わいのみちと七里程行ゆこ
ゝあ大木あるとあゝまをの
ちうぶうぎのちうぶぎのひまこ
をあゝぶゝぎちうのやをちう
と事おくゆり姫ゑいのひは
作をくしぶちくるゝあい

いろ〳〵べゝあのゝまへしぶち
おぐんりうあの入ひゝをく
宮しぐひこゝあ入ゝ
やをせあへしぶやをれ程のう
ゝくぶのゝあゝ金
こゝあゝりいぐ大宮三石
三年ほさせくひちゝをせ
のをちくいをてくあのゝ
あゝゝ分ぶゝのてを
くれしぶゝくゝまちり
ゝちりぶちゆ日乃卯の刻よ
おひちゝのをくめゝ
ゝしぶゝ

ぶるのてぶうるせだぬ
ぐんとうるるだあへぶるし
こみちるくぬめ紙ぐあるこ
まるぶぶるえつさてぶぐす
のせんるぶぬめ紙あるくれ
らんぜよとぶ浪くとを
くれぐぶへのぐくぬ亜とう
くるるぐく
ひちとふく
あくられ
りるくく
ちるくへ
あるるる

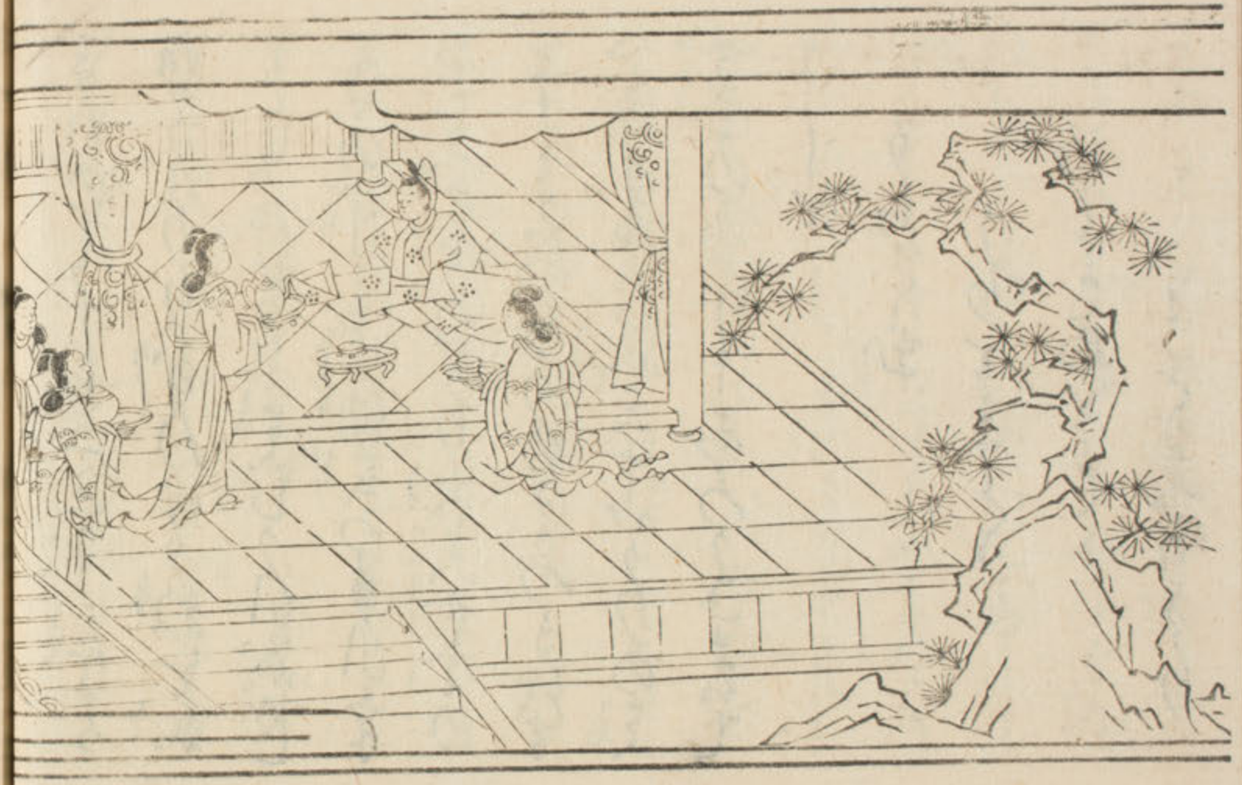
やくあつ　くびつぐとおが
ちとこんこんぶるのと
こどもたちはけらの所ぬ眼とこの
らちくはけらんどしぶうんく
こうつこの地ちそつこまふ
ぶらこ爰いどくくへるくぶ
いこちをこつとおぶくて
ここうよ彩ぬさて彩とふく
はてみとまるべよぬとる
くくあゆこのふ彩りへ人
よあのくばおこいはくと
ーこやくこふあしがんてん
こくとぐはこへけるさてかん

ちんこのこうからのくこて
作こやここの当へもこるろ
みちと南へ彩くはらんせよ
こあからるこうこるべくこと
こへけるぶまてこ彩はめ
しぬ彩ふ彩よ野みく
るふくくくくんく
角いくこくこくこくこ
ぶるはこるこるーぶきて
よいここのいろこれぶんふこ
ごのごくくぶろくのりん
ここてこのりんここてこれ
ど金のいここ二町ごりここ

てりぞの間さぶらひのそらに
めるふりをせかうしやうごん
のをくはをせていとまうり
やそくしようつずあをを入く
ゆらんどれかむのをさしに
むの屋むをてぶむをを
ぞれをこをうくうくこ十
ぞうりるる天女をうらくとる
まくまり南へゆのとうく
のけうを行よ枝ををまこと
ゆとくをををくをくを南へめ
うりゆらんどれを日本のを
うりをうくでんとゆくして

をうのをくうら二三中をを
ゆてんありむのゆう数をを
とうをけうぶをむうの水ぶし
をの中よ中納云おのの字
つをよ言をみぶうり水天女食の
をくをにをりのをうをを
つをり来りよ二十ぶうりのを
女食の魚いしをうをまをて
くくを

うちくを出
うちをくく
ゆをををを
いをぶうをうう



中納言くらゐおもくまこけるが
ごんてんまいるのようくるか
くいあさきをさくふのめどくらい
ちらぶるるうぶしくらぶいぶく
のびしくあとのらびやとお
りのびるりぞくさうく入
るあぶるめくはらんを所
よぞうびくあまのさあるり。
御入浸よ。子ぼうりのそう
女ものごさよるちさ一尺
ゐそくのぶろくくのくき
もんとそるくくまりくりぶ
おくとそぬ中納言らうん

とゝろ所をおぼしめすに
はらんどしたいこのやう
なるものゝ人へりもあり
おもてもあらんどうのそう
ゝくぱのはるばるまつくあ
るものゝそんとみくかくそう
ぶもつまこにはるゝ人へ
ゝうとうそうのみよう人へすで
よそんめいそうもねぶつ
ゞ往の命とゝめとうらんや
るものゝさをりゆ沖縄ぷゝよ
つゝ大ものゝうそう人まこゞ
とかうら日ぶゝゝとうそう

ものとゝうかゝうゞとゝ
さゝゝうゝうゝうゝ人ゝくゞう
しゝうゝんくめゝまゝみくゞ海
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちまちパ方のこうりを落く
引ぎりぎりぐのうしを抜
こ屋ぶり。抜つこのちんをこ
結りんぐ新吟ぎーをむの
ちくぬぐりとふこ屋ぶり。
ちへ乙せ人ゑとうせめぐこ
うとこーあくしび出よきつど
ろこうろ天女。あくこくこくるど。
あぶあくこーやぐてこくい
ちうくくるこ出るすと指め
しをに

いのとてく

くへうくこうり

中ちどんひのおるこうびおこ
まくへる所ーよぐんでんとうむ
ろうろうとめこれいこうくぐ
ふくて出ものふこの出発ま
そおーまうとるんぐこれこ
まうこと服と一所よるこ人
ちぐへとくここまーをま
変ーのちーろせしる服
どろこんやこうらせの出
のこくんまこといふのお
つとのあげ七こいろ年ちを
うづのこくぐのこと死よそ
ちへんとぐこうぐーちをう

て、ぜんぜんの天地を
ものごとの始つかうしの五
はるかーのうてみ日とすご
して八つうえすてとはる
さてもぶとうるはうちん。
そぐよのつひのちんくを
おーぞりもぞうぞう
どうのをのぶとりよぶると
ろうひるりをとのとりぶ
ぐくもれぶよ人のらぶは
ろくよ年のようのとみるぶ
人のるやくぶんとおりの
ぶまるさてうるようくさ

よのあるくんとうぶ
のとりぶらせのあ形はん。
はあ紙ぶくるにうふく。
神力をえるぶりをもを
ろうるんくぶけあ
くをぶんるる紙あぶ
あるり中納云をもあり
しあもあるようどぶりあ人
ぶるぶぶ紙とる人非果のは
こ紙ぶくぶそをこうるはと
みくはぶぶ月年の出判
とあるうをくぶ天ドみりぶと
ぶあぶのらをもうくを

うるまるべくとゝまるせあの
えれがたんえりよりはんとあそ
だゝ中めどんよりびあつと。
そばうまうろあゝうあへ
とりちまとこのくまへだ中
おどんえうぬおとおりおどと。
飛ゑんの文のはりとれるへだ。
をどりおゝさからぶうとおし。
ちろくはゆへ海うまくゝも飛
えんりおうゝ海さぶくぶのそ
もあまとゝぷぐよじせびは
ひろりがんでんゝもうゝや
ようそしよおばゝめゝてぷら

そも飛あそのあんそうんあう
るべうるぷぐうあおはをし
けうぷうんあんあまくゝ門おま
でとくうまてまうりぷでゞ
めうこ海とまぐゝありとも
おばこゞりけうぷうるまて
いどのけるれゆくゝと急うぬ
のりくゝぷうのうたゆあ
海あうまくゝろ飛よこまい
とびうるあぷめ紙のう来海
らんどれしぷるの約へ系のや
るこうるうるのぷどぐよ門義
へさんどいあうや

がんでんとうろう　ゆめの
ゆめとうつつとをしらぬ
ものとなりぬ　ぶつぜんの
ゆめのうちのうつつ
おもひあらしそうぞくして中納言
ゆめうつつとはしらんとしば
しのあいだ　ものもいはず
ぼんやりとなりぬ　ぜんぜ
ん　ゆめうつつとはしらぬ
ものとなりぬ　ぶつぜん
ゆめのうちのうつつ
ゆめうつつとはしらぬ
ものとなりぬ　ぶつぜん
ゆめのうちのうつつ
ゆめうつつとはしらぬ
ものとなりぬ　ぶつぜん
ゆめのうちのうつつ

山雀はつかひくれなゐをしてこもぬ
あをくてとほもきかくしわれ
夢(ゆめ)かうつゝかうたゝねすがらさめて
のちとしつきびをあくかり。
ころうく八月おかたかしおか
まこじはゆしう花(はな)の落葉(らくやう)を
へそよめきく松(まつ)かせもそお
やさしくやまつうぶわかれ
わきからかいろうしもとき
やう律(りつ)さらかしさかかうり
あなひとりのめぐりぞうおか
みての露(ろ)もとうせくまで
うへかりるかかくさ

まどろむかたもなけれはまた夢(ゆめ)
まぼろしもみえずかとさら程(ほど)
よそのくもぞくのこほりもしかく
あかつきおほしくてもめつ
らとのうきまで思ひつるとも
あるまきさりくかの
とみしかれば流れゆく
つまのひとめさえあらで
きこえるぞとしいとをきるたとゑ
まつともつけふ七日のゆふべ
とをしのなりつる流刑(るけい)に
とつ君らんとやうやく娘(ひめ)は
あやうくものへのさいめん

ゐのどを養ひて復生
のえんとすれどもぶこと
ときよいのまくりあつさ
ぐるとしるるふ八十ばり
ゐらうそうのゆかどん乃花
よこあのくぶんぢ飛こえ乃
形をくくおりぐそよ
つとしのぎやそとてつくの
もろく人形ぶんせんこうて千
日やすやすうるうどやえし
ゐしくめりぷ夏ともこうと
も形ばこと紙くうんあんの品
はきこ と形のまくよいく

一人形ぶこうせんぶのよびん
せんしてぶくぶどんつもれ波
紙をくぶはくとくりと
もるくおりのるふぷんれち
こうあつまるしぶど紙離き
て十三日やすおだうせうる
て波あくぶるとりのこび
まくりぷ十ぷそうの鼻乃か
あのゐつるも吹きりくち
つもくるりうれた中綱云
のあされうるの紙ぶうきこ
くどてらせのあへそ吹
つきりあるみあやよこ

ふぼうそくふうとそぢ[illegible]のつぼ
ゐ[illegible]せの人ともに[illegible]と
ゝらぬくのがつとぷろ
ふせいあるものあまそ集
てぷそりるぬこおりやと
んるくんそぢよりるうら
ぬもいあゝくこのくまて
ゝるんるんどゝいふとゝろ
くぷゝとのまくいそこゝ所せ
ゝくゝぷろ所ゝくゝ
ゝんゝゝ

とゝ

ゝゝ

一年がんぐでんとうの姫君様
とんとんがんぐでんへおなせ
しぐぞてんとうとうめれ
ものくぐおまーしよ入まう
うちのこの公姫神つとうを
うんくぐらうとあぐり姫様う
たのひとうぐのうさえたよあぐあ
うーうぐうのうんぐーとうひめ
えうの山毎きーやこのあとて
あぐーよぐうりとてお日様と
うこのふるうしぐーとうくく
うりのどとぐうえたと貴へが
山へいまちうんぐのうまへあ

ゆーうくくのうのやぐぐ
形ぬせうふぐのうやーや
ともきうぐーとふまめやう
よくうきぐうぐ姫様ちえ
まぐこうやくぐ日様のうんごの
ぐうのうるぐぐーうせーお
とうくくぐとぐぐーあうくし
うまぐ日様いぐくうへうくく
まうぬとぐぐうくーやと
ーきうぐんひまれくぐぐ
くーのうぐくぐぐんぐ姫
えのうやうのうくあう
いぐくとうやうぐあ

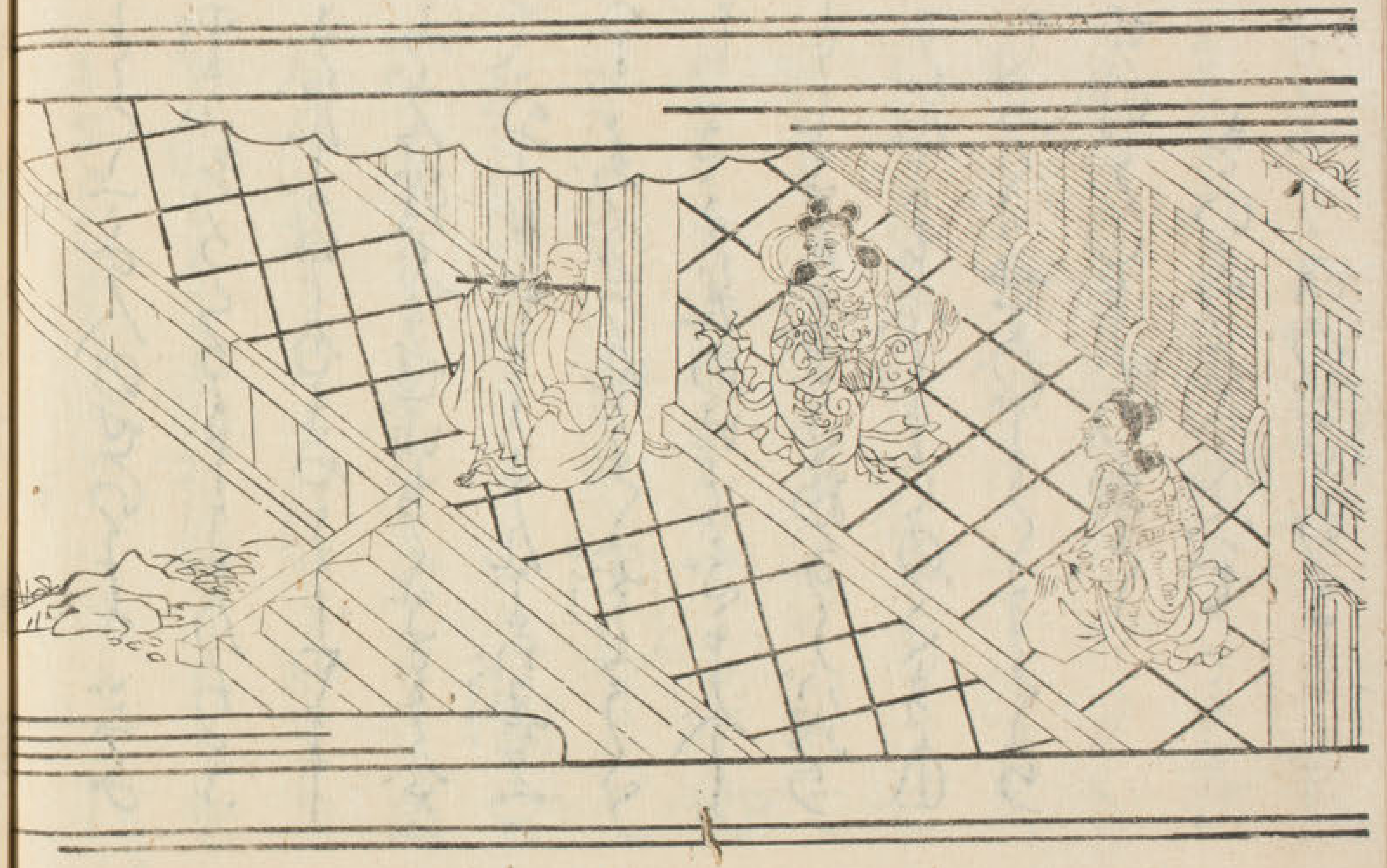
屋がまへのやさしくして。
いろ〳〵の花やさ庭とらんさ
まことらんじやうは花さとばう
しるぞしくまうりさる程より
まことしと時分のとしかく
風よふきもやさしれいしこの
鳴はさてうしうりぞてちく
りんとしりぞうりいはくは
ていぞおがさてさうり夜
とのくまへむやまき花はとの
こゝぞうかしうむまとめとぞや
らん女よりして。姫君の侍る
よきかしく娘く

さはりぞもさう女。ぢんつゝ女がおくに
う女まゐりんしや女としがまいらく
乃女ぞう彼らさくんはつきや
これはぞうへまゐらぞやうじやと
たぞくりんもうしもはてゝわ
はゆぞて氣しせまへとぞかける。
さるはどふぞくりんれいうし
つまはつうはおつもぞうりいかへ
ぞ乃すゑもぞくさつる哉
とぞいそくぞひうへさしせよ
との御世んどまうらぞうり人
気りくりぞくりん生は絵ん
よしごとのさへつる初を吹

とくさまへ
ふるさとの
ものがたり
とこのふぶ
てきんきんでめでたし
けるさうはせんとぞ
ふるさのふぶまいやうる中紙
ゑんの花のまやかやうの人
さてのちらやうしてぴかぴか
おうきんきんぴかぴか
ろのぴかりとはうんとぴら
をびりりびおおーりを
まるでぴかぴかしる

とくさまへ
ふるさとの
ものがたり
とこのふぶ
てきんきんでめでたし
けるさうはせんとぞ
ふるさのふぶまいやうる中紙
ゑんの花のまやかやうの人
さてのちらやうしてぴかぴか
おうきんきんぴかぴか
ろのぴかりとはうんとぴら
をびりりびおおーりを
まるでぴかぴかしる

かくてやまのおんほうしな
かゝりけるところにこゝにふしぎや
かのふえのねくりかへしきこえけるまゝ
いつくともそらにきこえけり
中のおしまやらんあがりけるを
きゝたまひておりしものとらんが
しやうくわんの笛吹いでやし
しらべまいらせて管絃の
みちをうけたまはりがんてん
まうのつきのみぎりによば
ぞうおんきやうやらまうじん
をじやくがおもむきをつたへ
みふたんきよんのしあそばさ

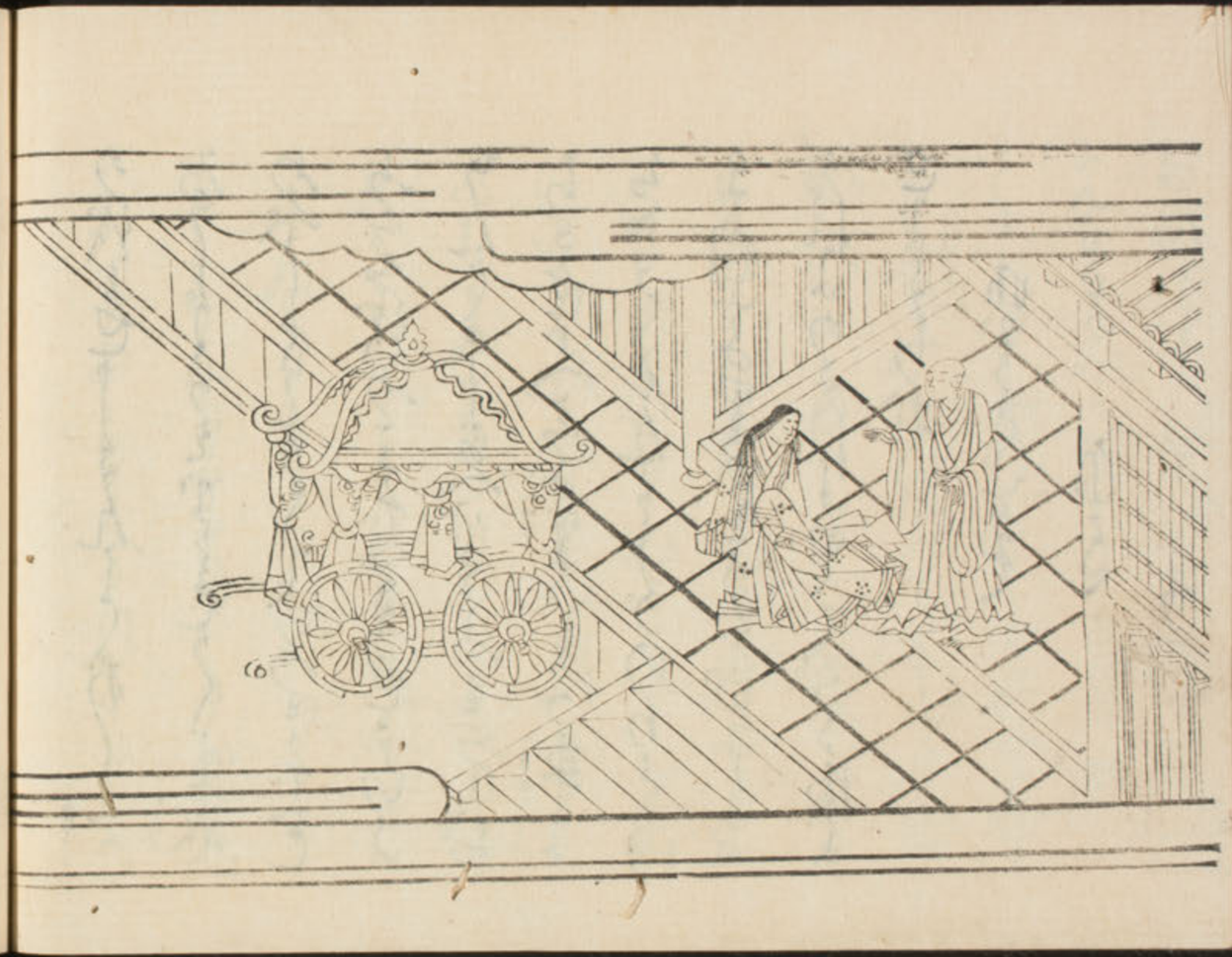


すげんぜうのつらん給ふてけ
のくざうちさ白河のぢらくざら
まうとしのしくおぼしめし
ひらんぜきしこのかうさう
もぢしかりぞうしかせば。
きょうもしぞやかしけつづゝの
しのまへとふくぢうく
りぬらんとてそれぞおもし
しきるぢうほどふかすだ
かなのぢきいまんらくのみど
ぢましらうしとぞかけける。
まうりんまへわらくしを
こそまつるぢきぬきらう

さうて猶よ姫君のおほせて
らくぎしさこのへかしめざめ
またやかざいしのへかしめ文
うろうづちくのけうやうの
さめよぜ日ふらん給うさく
とやうせんしおうつそみく
おづうらもぢら給のしうよ
しそぢやうりんさまへと仰
くれぜうきさほかるとぞや
けうぞ日のかるさま給すゝめ
あひきるおづうらも姉妹
しねぢう仰とふまれしう中
すぜんやりぢのつもしめくる

おぼしたちぬるをみてが
うんぜるべきやうもなかりし
とてうちおきてうせにけ
るとぞ吹みだれたる上の風
雨にまぎれてくるみあるせ
ものうらに雨もそそぐまを
きぬぬのやうにぬれをあ
ひのりかねてうちなげつまてく
おらうせもの人くのうちに
こしらえとれるをぬ雨
うせぬるまでおちとも
しんるるをくるかうる
ものゆゑにうちこぐ

うせにけるとかいはんとおもふ
なりけりとやとまりくるよ
ぬべきうちてうまでを
うえんかうてもせられ
せんとやうの人ぶつまてを
ちうせ人をるみ雲うきろ車よ
ろぷくくんとこぐのうくゆく
ちぬぷこみのきうろぷ
うれよめうしてぷ雨よ
さしのうちぞ
はそぐとぞ
のうち



中ごろ、ぢんぢゅうこうとぞ
ばしどころ、ものうまれ
のごとく、ものうまれ
ーせどころ、くるんとまれく
ものまこと、ものんなや
ちぐうりきんぢゅうの龍
うりきうぢゅうの龍と
みくうりうらぐうまも
御べるしいまぐこよ龍さん
とぐまこばぐうおとこよ。
ちうおとこ龍ろくし
て龍ーやうぐくるうあるう。
へいあぐまぐとうまず龍

ノ殺もとそこそこと脈をとる
脈のようすをみるのくすりを
おそそそそそそそそそそそそ
みるふるるるるるるるるるる
ようやくみくすりをのむ
せんぶんつくあくそくあく
三人ばかりあるくくくくく月
ころころころれぶみるこころの星
うきろろろはさるるるるる板を
くらおくくくくくくくくくん
ようのようようようようん
ようんぶれくくくくくくを
ひとろろろろろろろろろの

けろ中ようもしろしやあるやう
やうふぶんのようもあるくふと
てあるるるるるるるるるるる
ようるはくくくくくくくくど
くくせるるるるるるるるるく
きくくくはるるるるるるるる
ろくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

あぢさゐ
よとのつゆ
つゆ
きるぬ
ふるこ
あしの
えこけ
ぬきう
しとお
性さ
えが
るぬ

くてんのとくこあらり眼い
やつとりどくるりそ
としておどりあらりえきる
ろる性よぬぎるく姫ろこ
乃ろるさふとびつるぬ中
納言ぬらんじてぐりゆ
ぬるあ紙とぐ男乃とと
りくも命いろくのあり
どぬ男のようこめ紙ぬせ
さんろうるりきしとどろ
まへのあどこいとりを
るるつまぐ一せぬぎりのれ
ちぐりそのこまんそこへ

ひ慈まことにいけるはありがたく
りんしうのことはとおもへばく
これ人けの縁はおのれしかれ
そこでおもひきつてしからば後
ひろいかへつまねいてのちく
あるひはおしらるゝはやまん
きう迷のことやまた弟子の極よ
つきらはきらの極とし二人の人に
らかにて人くらそのかゞまりにゐ
ん乃門をさらくに変化てら
弥こゝろしてまた弟子乃位え
ぞおりしきるがりし位ゐ
らくおまてそのひとかをまはせ、
とのしおもし庵はおくまん
せんかみちらくてくのきまよ
あさかやまのみづまつりしの忘
ましかうれしせの事のあるとも。
ふほそてさそてこきるしんいれ
あ給くろ八まきで縁く
つきのくちのき弥おもしい
もとくしてもくもかすくばちよ
いそいかいてゆきみてよいとぞお
まことでいてきりけりとはなる
みおくのくてらるまて人へ
人出くおやしましにとらあまき
ふ中一级云へ座くなとちまう

てうそぬいそうんくのうまへ
じぶんのおとうとぶんへ
よりうきうぶるぐのじ
せびくぐ侍そうらう
りぶくんどくやうまふ
そうくうぶんぶもんあつと
しうり侍きつうくぶ十六
けあぶぶのぐのしせあふ
くはいつうぐのくよれつ
まうそんとうそのうぶいそ
ぐいりへうしうんと侍まこ
ぶうくうるうんどうりぶえん
ぶあうとうぶうぶんぶ侍へ

どうてぶんでんとうの服
ようせりとく点ぶらんじき
ふうとうぐうぐうたるうとおぶ
しめとうりぶんうまやうか
きぐじ丹後ぐうらまのつまふ
おとうぐぐうそうのせんじう
中うぐん　うふぶうううみあ
こうあうぶんぐめしうとあぶ
そうぐうんぐへうぐうと侍の
うみぶんうぶ八十うようのあ
えいぶうりあのううんあんと
あううまこあふ

中ごろ、ぶしのもんじゃ
とまるものくぶるやう
とさうぞくのうんぷうげか
しとも中くぶるもの
ふるまりをりやせのとよ
しぶ色ぶうまうせぶか
うぶうふるうあのぶれ
うとうとのぶぜんうしるり。
そう代ぶうぐもやらせ給
なうもあのうんおんぶを
ひとのうんどものぶか
をかうら
ふるまうり